堀跡を見ながら大膳川を渡ろう

亀居城の堀

日本の城の特徴は、勾配の付いた石垣と堀と水との調和による究極の造形美です。堀と石垣・土塁が城の生命線で、亀居城にも小さいながら堀が廻らされていました。

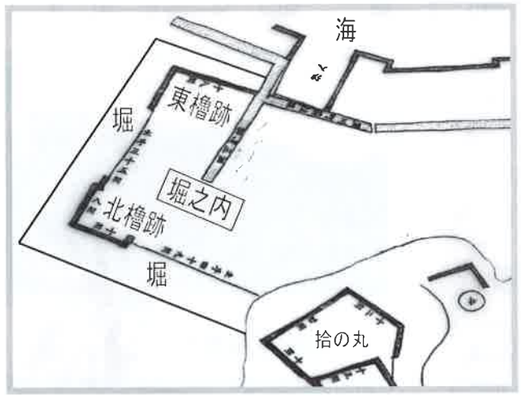
黒川一丁目東櫓と二丁目北櫓の石垣を土塁で結んで、その外側を堀としていました。土塁とは土を掘り上げて、その土を盛り上げた台形の土手のことです。亀居城の土手跡は幅4間との記録が残っています。土塁の断面と堀の断面は台形を逆さにした形なので、堀幅も4間と推定でき、現在残っている石垣と水路の間も約4間（7.3m）で一致します。

堀の延長は約280mで海水を導入していた潮入りの堀でした。

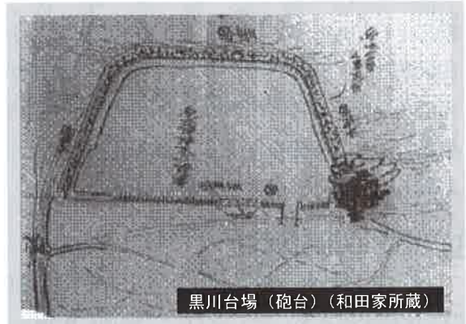
現在も水路がコの字形に曲がっているのは堀の名残です。

黒川村堀之内

黒川村の人たちは、往古、墨石川（大膳川）のほとりに住んでいましたが、亀居城破却後に堀の内側が空き地となり、村人たちは追々空き地に移り住み、村名も黒川村としたと「国郡誌黒川村」は伝えています。



小方村 古城跡絵図（広島市 上田家所蔵　模写・一部加筆）


黒川台場（砲台）（和田家所蔵）

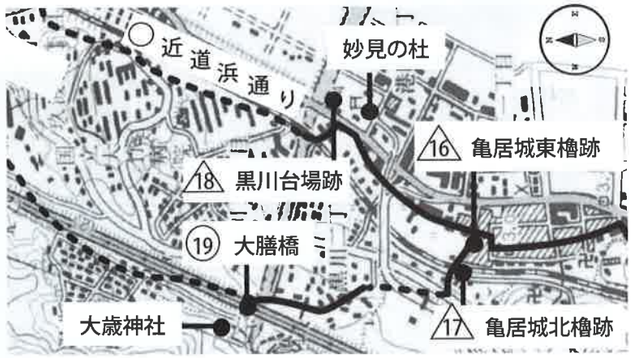
18 黒川台場（砲台）※

大膳川の河口・妙見の杜東側を埋立、台場が築かれる。（説明は8ページ「小方台場跡」参照）

◯ 近道浜通り（浜伝い通路）

江戸時代中期以降干潮のときは、妙見の杜のほとりを通り中浜海辺（海側に土手）を通過し、玖波に至っていた。

山麓伝いの本道を通るよりも約700m短縮できた。幕末には大膳川・恵川の下流にも橋が架けられていた。



19 大膳橋

往古、黒川谷では炭焼が盛んに行われ、川も黒く濁っていて墨石川と言っていたそうだ。

亀居城築城のとき、普請奉行・古造大膳が本格的な板橋を架けた。村人は喜び大膳橋と呼び、川の名も大膳川と言うようになったと伝えられている。

その後、橋は土橋に替わり、幅2間長さ5間であった。現在は「湯舟橋」になっていて、国道の橋が大膳橋となっている。

村の中心地は城下町の道であった大道と、そこから縦に延びる通称「たてまち」で、地名も堀之内となりました。

江戸時代後期、村の家数は75軒前後でほとんどが堀之内にありました。長州の役では民家62軒、納屋19軒その他を焼失しています。

歴史を伝える堀之内の地名は、今では知る人も少なくなりました。櫓跡・堀跡・堀之内は貴重な文化遺産です。

亀居城東櫓跡

16 亀居城東櫓跡

城破却のとき、東櫓隅の石垣は取り壊されたが他は破却を免れた。石垣の高さは一間あった。今は水路の底がかさ上げされて低くなっているが、ほぼ400年前の姿を残している。

亀居城北櫓跡

17 亀居城北櫓跡

城破却のとき櫓隅の石垣は取り壊されたが他は残った。石垣の高さは2間あったが、今は周囲が宅地化されて高さも低くなり一方向のみが残っている。

地元では「人桝の跡」と伝えられていて、築城の際に人夫の数をはかったとか、軍勢の数をはかったとか言われている。佐伯郡誌には「軍勢を量る人桝の遺跡あり、方形にして高さ凡そ1丈（3m）、石を以って面積130坪あり、全国有数なものなり」と記す。

小方・黒川村周辺（「行程記」部分）

苦の坂を下り一里塚を過ぎると、海に面して小方村の町並・黒川村を経て大膳川を渡る。海面には島が多く描かれている。